日米アフリカニスト会議報告

吉田昌夫

会議の趣旨と経緯

1992年9月15日から19日までの5日間，アメリカのロサンゼルス市にあるカリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California, Los Angeles, 以下UCLAと略す）において，日米アフリカニスト会議が開催され，日本から10名，アメリカから10名のアフリカ研究者が集まって熱心に討議が行なわれた。ここではまずこの会議が開かれるに至った経緯から説明したい。

1960年代に遡るが，当時今回の会議の主催者であったUCLAのアフリカ研究センター長のポズナンスキー（M. Posnansky）氏が，ウガンダのマケレレ大学で，大学院のコースのアフリカ研究科の責任者をつとめていた。ちょうどその頃，筆者はアジア経済研究所の海外派遣員となり，マケレレ大学の農学部大学院生として赴任し，ポズナンスキー氏（考古学専攻）と知り合うこととなった。時は移って87年11月に，筆者はデンヴァーで開催された全米アフリカ学会(African Studies Association）の年次学術大会に招待されて，「日本におけるアフリカ研究」について報告を行なったが，この時たまたまホテルの隣室にポズナンスキー氏が泊まっており，旧交を温めることとなった。全米アフリカ学会年次学術大会には，その前年にも当時の日本アフリカ学会会長の山田秀雄氏が出席しておられ，この後も北川勝彦氏（現四国学院大学教授）が報告をしたり，学会機関誌の *African Studies Review* にドルー大学（Drew University）のピーク（Philip Peek）氏が，「日本におけるアフリカ文化人類学研究」と題するサーベイを執筆したりして，日米のアフリカ研究者間の交流の機運は高まりつつあった。このような状況のもとで，ポズナンスキー氏と筆者は，日米のアフリカ研究の内容を，もっと互いに理解する必要があるのではないか，そのために何か協力し合えないか，と文通によってよい方法を探っていた。

1991年の1月から3月まで，筆者はUCLAの客員教授を務めたが，この間に「中国とアメリカのアフリカニスト会議」に参加する機会をえた。中国から約10名のアフリカ研究者が訪米し，ほぼ同数のアメリカの著名なアフリカ研究者と会議をもち，意見を交換した。これを見て筆者は初めて日米アフリカニスト会議のイメージを持つようになった。今までの日本のアフリカ研究者は，アメリカの学者の書いた本や論文を読む機会はかなりあったが，個人的にその人となりを知る機会は少なかった。一方アメリカのアフリカ研究者で，日本のアフリカ研究に関する本や論文を読んだことのある人はほとんどないといってよいぐらいで，まず日本のアフリカ研究の実情をアメリカの学者に

知ってもらうことが先決問題といえるような状態にあった。アフリカに対する両者の学術協力を最終の目的にするにしても，まず日米が互いをよく知らねばならない，というのが，ポズナンスキー氏と筆者が到達した結論であった。

こうして今回行なわれた会議は，日本の国際交流基金の中に別枠で設置された日米センター(英語名はCenter for Global Partnership) の助成金をUCLAが取得して，正式名を Japanese／American Africanist Workshop for Cooperation in Africa として開催される運びとなったのである。

出席者の顔ぶれと報告のテーマ

出席者は，最終的に以下の20名であった。

青木一能（日本大学教授)／Richard Bradshaw (Prof. Ohio Univ.)／George E. Brooks (Prof. Indiana Univ.)／江口一久(国立民族学博物館教授)／福井勝義（同上)／林　晃史（アジア経済研究所調査役)／日野舜也（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)／井上一明（慶応義塾大学助教授)／犬飼一郎（国際大学教授)／Patrick Manning (Prof. Northeastern Univ.)／Edmond Keller (Director, J. S. C. African Studies Center, UCLA)／Milton Krieger (Prof. Western Washington Univ.)／Gwendolyn Mikell (Prof. Georgetown Univ.)／森淳（大阪芸術大学教授)／Philip Peek (Prof. Drew Univ.)／Merrick Posnansky (Prof. UCLA)／John Philips（秋田法律経済大学助教授)／Allen F. Roberts (Prof. Univ. of Iowa)／田中二郎（京都大学アフリカ地域研究センター長)／吉田昌夫（中部大学教授）(以上，アルファベット順)

会場は，UCLAの広大で美しいキャンパスの中心部にあるRoyce Hallの会議室であった。新年度がまだ始まったばかりで，キャンパスに一般学生の姿は少なかった。会議はまず各参加者が自己紹介を行ない，各自が，あるいは自分の属している機関が，これまでどのような研究を行なってきたか，について簡単な説明を行なった後，用意してきた報告の発表に移った。報告の内容は，分野別にまとめてみると，次の五つに大別される。

第１の分野は，アフリカの歴史，およびアフリカ史を中心としたアフリカ社会と文化について，大学レベルで学生をどのように教育するかという問題に関するものである。キーノート・スピーカーとでもいうべき最初の報告者となったパトリック・マニング氏は，アフリカ史とアフリカからの移住民史を世界全体の問題（Global Affairs）の中に位置づけることが絶対に必要で，これにより世界全体を解釈し直すことが可能になると強く主張した。同じような主張はジョージ・ブルックス氏によってもなされ，インディアナ大学の一講座「世界史の諸問題」(Themes in World History)の中で，彼自身がアフリカをどのように位置づけ教えているかを説明した。ミルトン・クリーガー氏は，アフリカの文化と社会についての入門コースを，彼がどのような点に考慮を払って教えているか，付表に示したような詳細なカリキュラム要綱をつけて説明した。これらのアフリカ史への視点とアフリカ教育の問題点とは，近い将来日本でも重要な問題となるように思われる。またアフリカを知るためには，学生がある期間アフリカ現地に生活して，体験を通して学びとることが有益であるが，ポズナンスキー氏は，アメリカの大学がアフリカの大学と協定して，交換教育を行なってきた経験について発表を行ない，このような方法の利点を強調した。

この他，歴史分野では林晃史氏の，日本におけるアフリカ史研究の詳細なサーベイ報告があり，

また日本の大学で教鞭をとっているジョン・フィリップス氏の，日本の学界におけるアフリカ史の扱い方に対する厳しい批判を含む報告があった。筆者は先に行なった日本アフリカ学会員へのアンケートに基づいた「日本の大学におけるアフリカ講義」について報告したが，これもアフリカについての教育の範疇に入ろう。

第2の主題としては，日本とアフリカとの関係がとりあげられ，R・ブラッドショウ氏の「ヨーロッパによるアフリカ植民地化と日本」についての報告，青木一能氏の「日本とアフリカの経済的・政治的関係」，犬飼一郎氏の「日本のアフリカ経済援助」の三つの報告が行なわれた。

第3の主題は，アフリカの政治の現状に関するもので，E・ケラー氏（ポズナンスキー氏からUCLAアフリカセンター長の地位を引き継いだ）の「アフリカの政治変動と政治研究――1990年代のアジェンダ――」，および井上一明氏の「日本におけるアフリカ政治研究に関するサーベイ」が報告された。

第4の主題としては，アフリカの社会変化にかかわる諸問題がとりあげられた。ここには文化人類学あるいは社会学的な分析方法を用いた研究が含まれる。フィリップ・ピーク氏は「日本におけるアフリカに関する文化人類学研究のテーマ」という題のサーベイ報告を行なったが，日本側からは，日野舜也氏の「日本におけるアフリカ都市社会の研究」，江口一久氏の「アフリカ言語および口頭伝承の研究」の二つのサーベイ報告がなされた。ただひとりの女性参加者グウェンドリン・マイケル氏の「家族の再定義――親族の新しい関係に及ぼす国際的・国家的影響――」という報告は都市社会の具体的な動きを家族の変貌という切り口でとらえ，アメリカ人研究者の問題関心のありようを鮮やかに示したし，田中二郎氏の「日本における生態人類学研究」および福井勝義氏の「エチオピア南西部における民族知識とエスノシステム」の報告は，日本におけるアフリカ研究の方法的特色を明白に示していた。

第5の主題は，アフリカの伝統工芸と，アフリカの博物館の窮状とその救済についてであった。双方ともアフリカの文化的遺産をどのように残し，未来に向かって役立てるかという問題がかかわっている。最初の報告を行なった森淳氏は，このような伝統工芸技術の比較研究の重要性を強調し，アレン・ロバーツ氏はベナンの国立博物館が直面している種々の問題を取り上げ，日米双方がわずかな資金援助をするだけで，アフリカ人が受益者となる貴重な文化遺産保護の貢献ができるのだと結んだ。

今後の日米アフリカニストの協力の方向

報告は以上のようであったが，今回の会議の目的である，「アフリカのためになる協力」をどのように進めたらよいか，という問題を，会議の最終日に討議した。その討議の材料として，(1)アフリカ研究の国際協調，(2)アフリカにおける調査協力，(3)教育問題についての協力，の三つのグループをつくり，各々がそのうちのどれか一つのグループに属して，たたき台となるメモをつくることとなった。

筆者は(1)のグループに属したが，UCLAのファカルティ・ダイニングホールの一室で食事をとりながら話し合ってまとめたことは，今回に続く第2回目の会合を日本で，第3回目の会合をアフリカで開くこと，この計画の具体化のための話し合いは，1992年11月にシアトルで開かれる全米アフリカ学会年次学術大会で開始すること，日米アフリカの3者の人員配分を1対1対3の割合にすることと，協力の分野は人文，社会，自然科学，応用科学，その他，で資金提供者にもアピールでき

るものとすること，などであった。(2)のグループからは，アフリカ内での調査や会議，アフリカ外での会議で三者が協力すること，アフリカ人の執筆した論文の出版，アフリカへの事務機器の援助，さらには研究情報の交換とアフリカ人研究者育成のための協力を行なうことが提唱された。また(3)のグループからは，衛星を使うデータ送信の可能性をさぐり，教育材料（教科書やビデオなど）を交換できるようにすることや，日米の学者がアフリカで教えるなどの人の交流を促進するような長期的展望を持つことの重要性を指摘するメモが出された。

これをたたき台として話し合った全体の会議では，内容を絞り込むところまではいかなかったが，全米アフリカ学会の会議で，できるだけ多くの人に意見を出してもらうこと，1993年にはぜひとも日本で，多くのアフリカ人を呼んで第2回会議を開くことを計画することが強調され，日米アフリカニスト会議は5日間にわたる全日程を無事終了したのである。この会議の実現にかかわったものの一人として，これがアフリカ研究の日米交流の第一歩となることを期待している。

（よしだ・まさお／中部大学）

付表　クリーガー教授が実施している「アフリカの文化と社会」コース要綱

1．コースの概要：アフリカを見る

A．伝統的アフリカの物質的・文化的基盤

2．アフリカを考える／3．歴史的進化／4．人間の共同体(コミュニティー)／5．共同体を超えて／6．コミュニケーションの手段

B．外来の影響とアフリカの対応

7．イスラム教，キリスト教，奴隷貿易，植民地化：互恵関係から不平等化へ／8．アフリカの対応

読書：カマラ・ライェ著　*The Dark Child*

9．復習／10．試験

C．近代アフリカの出現：ナショナリズム，都市，エスニシティ，性別，階級などの問題

11．アフリカのナショナリズム／12．サンゴールの散文および詩（読書）／13．クワメ・エンクルマ（読書）／14．アフリカの文学

読書：チェヌア・アチェベ　*No Longer at Ease*

15．近代アフリカの女性

読書：マリアム・バー　*So Long a Letter*

16．ネトの詩（読書）／17．復習／18．試験

D．現代のアフリカ　(a)政治と経済

19．映画"Boom Town West Africa"／20．クワメ・エンクルマ(読書)／21．独立後の情勢／22．事例研究：ザイール（読書）／23．事例研究：ボツワナ（読書）／24．事例研究：南アフリカ（読書）

(b)文化的表現

25．音楽映画"Duro Ladipo"／26．美術(読書)／27．ングギ・ワ・シオンゴ「教育と文化の戦略」（読書）

E．コースの要約

28．物質的側面／29．復習（読書）／30．最終試験